

うしろうらう
外郎売り

拙者親方とおやかた申すは、お立会の中に御存じのお方もござりませうが、

お江戸を発つて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、

青物町を登りへおいでなされるれば、欄干橋虎屋藤衛門、只今は剃髪致して

円齋と名のりまする。

元朝より大晦日まで、御手に入れまする此の薬は、昔、ちんの国の唐人外郎

という人、わが朝へ来たり。

帝へ参内の折りから此の薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ冠の隙間

より取り出す。

依つてその名を帝より、透頂香と賜わる。

即ち文字には、頂き透く香いと書いて透頂香と申す。

只今はこの薬、殊の外世上に弘まり方々に偽看板を出し、イヤ小田原の灰俵の

さん俵の炭俵のといろいろに申せども、平仮名をもつてういろいろと記せしは

親方円齋ばかり。

もしやお立会いの内に熱海か塔の沢へ湯治にお出なさるか、又は伊勢御参宮

の折からは必ず門違いなされまするな。

お登りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟

玉堂造り、破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存知ない方には正身の胡椒の
丸呑み白河夜船。
まるの しらかわよふね

さらば一粒食べかけて、その気味合いをお目に懸けましょう。

先ずこの薬をかように一粒舌の上へのせまして腹内へ納めますと、イヤど
うも言えぬは、胃心肺肝が健やかになりて薫風候より来たり口中微涼を生ず
るが如し、魚鳥、茸、麵類の食い合わせ、その外万病速効ある事神の如し。
さてこの薬、第一の奇妙には舌の廻ることが銭独楽が裸足で逃げる。

ひよつと舌が廻り出すと矢も楯も堪らぬじや。

そりやそりやそらそりや、廻つて来たわ廻つて来るわ。

アワヤ候、サタラナ舌にカ牙サ歯音。

ハマの二つは唇の軽重、開合爽やかにアカサタナハマヤラワ、オコソトノホモ
ヨロオ。

一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ。盆豆盆米盆牛蒡。摘蓼、摘豆、摘山椒。

書写山の写僧正。粉米の生噛み粉米の生噛みこん粉米の小生噛み。縹子緋縹子、
縹子縹珍。親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、子嘉兵衛親嘉兵衛。古栗
の木の古切口。雨合羽か番合羽か。貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆。

尻皮袴のしつ綻びを、三針針長にちよと縫うて、縫うてちよとぶん出せ。

河原撫子野石竹。野良如来野良如来、三野良如来に六野良如来。

一寸先のお小仏にお蹴躓きやるな。細溝に泥鰯によりり。

「京の生鱈、奈良、生学鰹、ちよと四五貫目。」

お茶立ちよ茶立ちよ、ちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶筌でお茶ちよと立ちや。

来るは来るは何が来る、高野の山のおこけら小僧。

狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。

武具馬具、武具馬具、三武具馬具、合わせて武具馬具、六武具馬具。

菊栗、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗六菊栗。

麦ごみ麦ごみ三麦ごみ、合わせて麦ごみ六麦ごみ。

あの長押の長薙刀は誰が長薙刀ぞ。

向こうの胡麻殻は荏の胡麻殻か、真胡麻殻か、あれこそ本の真胡麻殻。

がらびいがらびい風車。

おきやがれ小法師、おきやがれ小法師、昨夜もこぼして又こぼした。

たあぶほほ、たあぶほほ、ちりからちりからつつたっほ、たっほたっほ干蛸、

落ちたら煮て食お。煮ても焼いても食われぬ物は、五徳、鉄弓、金熊童子に、

石熊、石持、虎熊、虎鱈。

中にも東寺の羅生門には茨木童子がうで栗五合掴んでお蒸しやる、かの頼光の

膝元去らず。

鮎、金柑、椎茸、定めて後段な蕎麦切り、素麺、饅飩か、愚鈍な小新発知

